

# 幼児の教育は 再建されなければならない



周 郷 博

はじめに

私は、この日本幼稚園協会がやってきたこの種の集りを、今までのように有名な人の話を聞いて帰る、というようなことをやっていたんじゃない間に合わなくなったような気がします。ただ人の話を聞いて、ほんの少し感動したり、半分は眠ったりして……そういうことで集まるのは意味がないと考えましたので、意味がないばかりではなくて、今の日本の状態を考えますと、なんか逸脱してしまった形の中で問題を本気で考えるという気力を失っている感じがしますので、つまり遠くから来られた人も、今の日本の「主人公」の一人であるという気概と確信をもって帰れるようにしたいと思ひまして、今までとやり方を変えました。

二日目と三日目、最初は坂田文部大臣を連れて来て、みんなで「つるし上げをしよう」といろいろ考えたわけですがね。ところが内閣が変わりそうですし、羽仁説子先生に最後の日に出てくれないか、といったら、一昨年からだが悪くて出て来られなかったものですから、二つ返事で「四日間出ます」とえらいはりきって……。あの人は、大変に全体のふんい気を盛りあげる人ですから。そしてその間の二日目と三日目、もっと小さなグループで、本当に親密に自分もつてる問題をそれぞれ十分に考えていく。そう思って、会場の方を考えたんですけれども、本当は五十人ぐらいのグループの方がいいと思うんだけど、全体が多いものですから、どうしても三百人ぐらいになっちゃうんですね。で、その四つの会場に分かれますけれども、そこへ私は毎日行って「元気をつける」役割をしたい、と思ひます。

参加された方は、つまり今、幼児教育をやっている人たちはね、進んで自分たちの問題をはっきりと出して、確信をもって帰れるようにしたいと思います。

戦争に負けてから、一九五二、三年ごろ、創造美育というのが日本の教師たちに活気を与えた時期があるのですけれども、その前は社会学が主であって—それも「社会学」—ただけでも—その前に無着成恭の山びこ学校なんているのが出たわけですけれど、その後、創造美育という運動が大変盛り上がった。しかし、それから以後六〇年代になって高度成長というものはますます実績をあげてくるにしたがって、政治というのはますます縛られてきて教育も詰め込み人形にだんだんなれちゃう。まあ、全体が今は詰め込み人形になってると思うんですが……。で、もう一度創造の時代とも違うし、部分的であるが無着成恭が山形でやったような仕事とも性質が違うわけですね、社会学というけれども、これは日本人が考えているような経済闘争だけをやってるのが社会学じゃありませんからね。中国はもちろんのこと、世界中で社会学というもの、マルキシズムというものがだんだん変わってきているわけですね。そういうことを考えて、もう一度、この停滞する日本の教育の世界に、教師たちが自主的で、そうして「人がかり」で、ただ俸給だけもらってればいいという、そういう態度ではない

「逃げ場のない状態」をわれわれはさがそうと思います。そういうつもりで、今年の方針を変えました。

### 「ことば」

私が幼稚園の園長を勤めてきて、二年以上になりますけれども、本当は早く停年になってやめたいという気持ちがあるんです。けれどね、これもやめるわけにはいかないんですよ。皆さんと同じなんです。つまり、フランスのマルキシストの代表であるロージェ・ガロデーという人の本を読んでいて、問題の解決より問題についての考えがはっきりしてくることの方が大切なんだ……。だから本当は、ぼくはその「ことば」を見つけないわけなんだね。いったいこの複雑にでっちあげてしまった日本の教育を、どういうふうにして「快刀乱麻を断つ」とでもいうか、原理原則に立って単純化する。そうして、いろいろなものをすてて再び本物の出発点に立つか、という、そういうものを考えるには個々の解決—ツギハギ解決ばかり考えていたんじゃないめなんだ。全体を眺めた上で、どこをどうするか、という「ことば」を見つけ出す必要がある。その「ことば」というのを理論というべきか。ぼくはそれは、たんに「知識」ではないと思うんだ。

あるいは、人間の問題ですから仮説といった方がいいと思う

んだね。この時代に必要な仮説です。仮説を立てる、ということとで、個々の問題にきりきり舞いをしているよりも、全体をひっくりめた一つの仮説をたてる必要があると思うんです。それを「ことば」というふうにいえると思う。それは *logic* でもいいんですけれどね。こういうふうにわれわれは核をつけないければ、教育者として、今の世界の歴史にかつてなかったような、大きな変化の時代に生きているのですから、教師としての生きがいを感じる――「教師」というより「教育者」といった方がいいと思うんですけれど――ことにならないと思うのです。そういうふうな問題が錯雑しているというか、つかみどころのない状態にきているところへ、中教審答申というものが出ました。しかし、それが出来から一カ月もたたないうちに、中国の周恩来とニクソンとの間に関係がいたりしましてね。日本がぼんやりしているというか、物欲にふけっている間に……ぼくはやっぱり物欲にふけていると思うんです。そして、みんなほっかむりばかりやってきたと思います。佐藤さんだけではないんです。その間に、まわりの状態が急速に変わりかけてきている、という状態が起きました。

ぼくはもう一つ同じ日に、三つの問題が起ったのに気づいているんですけれども……、一つは、ニューヨークタイムズがベトナムの秘密文書を勇気をもって公開するという、それに對

してアメリカの最高裁が権力者の側に立ったのではなくて人民の利益のために立派な決断を下したという、日本の最高裁と大分違う、そういうことが起きました。この同じ日に、日本でも少し小さいけれど、富山県のイタイイタイ病についての地方裁判所の判決が下って、公害のたれ流しをやっている会社が負けたという、これも同じ日に起っている。もう一つその日にソ連の宇宙飛行士三人が死んで帰ってきたという……。宇宙はこわいものなんだ、宇宙をばかにしちゃいけないんだ、宇宙に出ることによって大国であるというような競争で宇宙をよこしちゃいけないんだ、人間はもっと謙遜にならなくちゃいけないんだという、そういう事件が起こっているわけです。ぼくは、この三つはやはり時代が違ってきたぞ、という信号だという感じをもちました。そうして、この間のニクソンが中国を訪問するということね、これはニクソンが訪問するというよりも周恩来が受けて立つという決意をしたことだね。こういう変化というのは、日本をめぐっている状態が今までとは違って大きな変化をしているんだ、という実感をわれわれにもたせてくれたと思うんです。

## エゴイズム

ぼくは、この間から気がついていてるんですけれども、今の日

本人は自分のことしか考えることができなくなったんじゃないでしょうか。総理大臣として佐藤さんは、今の議会で大変せめられてまして気の毒です。自分のことしか考えていなかったからあんなったんでしょうか。つまり、佐藤総理は代表してあんなっているんでしょか。他の人もそうなんです。ぼくは、小田急で通っているんですけども、あそこで並んでいて乗る時にね、ワーストとはいってくるんです。席を取るのに大変なんです。ぼくは一番前にいる時以外は席を取らないようにしているんですけども、大体、一番前にいるでしょ、だからはしっこの方にすわれるんです。それである日、大きな荷物を持った年とったじいさんがね、一緒にぼくの次へ来まして、ぼくが一番はしにすわったらぼくの隣にきました。ところが大きな荷物を持つてるから荷物はヘリのところに置いたわけ。それでぼくがその間にはいっちゃったわけでしょう。そしたらこのおやじさんはね、ぼくに「かわってあげましょうか」っていうんです。「かわってくれませんか」っていうんです。「いえ、いいです」といったんだけどね。ぼくは「かわってくれませんか」といわれたらかわりますよ。荷物の側にいた方がいいでしょうから。それを「かわってあげましょうか」だって、ずい分慫ませがましいじゃないですか。それに似たようなことは、あらゆる所に

あると思うのです。自分のことしか、もう考えられなくなっちゃってる。出版社っていうのはそうでしょう。出版社というのは、電話をかけてきて「今度こういう本が出たから、これを売ってくれ」とぼくに頼むんだね。ぼくに関係ないんだけど、それしかいわないんです。「このごろ元気ですか」ともいわないんです。人間の感情全然なしです。自分の都合のいいような行動を人にさせたいわけなんだね。もっといえれば自分に得になることしか、もう見えなくなったんじゃないか、と思うんです。自分のことしか考えることができない人間になってきているということは、一方では、いかにも自分の心が貧しくなっちゃったな、という不安がたえず、つきまとっているはずだと思います。だから、その不安を慰めたいという気持ちももっていると思います。それは一時的な刺激によることだし、物欲にふけることだし、しかし物欲にいくらふけたところで、この不安はなくなるらないのです。

戦後、児童中心という考えは、敗戦後しばらくの間は、今までは天皇中心であったから、児童中心という考え方が魅力ももっていましたね。これは行きすぎたかもしれないけれども、しかしどういふ状態の中で児童中心ということが出てきたのか。子どもを中心にして考えるということ、今まではおとなか学問が中心で、子どもはそれについて来なさいといっていた。そ

れに對して、子どもを軸にして見なおそうということが児童中心だったと思うんです。ところが今は、みんな自分中心なんです。おかあさんだって自分中心ですよ。そして、今度そういう社会の状態の中では子どもたちも、もう人のいうことは本気で聞かなくなりましたね。せいぜい幼稚園の子どもぐらいは、まだこっちがその気になれば聞こうと思つてますがね。

ラジオなんかでも「じょうずな話し方教室」というものはあるけれど「じょうずな聞き方教室」がありますか。聞き方を、どこでも教えていませんね。自分を主張することはやっていまして、人のいうことを本当に分かるというふんい気はないですね。「叱り方」という本はあるけれども「叱られ方」というものについて書いたものはあまりないですね。叱られ方がうまいということは、一生得なはずです。だってね、叱られたらすぐに角を出していればなんにも学ぶことはないわけでしょう。自分に都合が悪いけれども、その時ちゃんと向こうのいうことを聞いているというの方が、一生涯をかけて考えればプラスになることがたくさんあるわけです。ちょっといやだったら、その人のいうことを聞かなくなってしまうということは、ここで成長する材料を取り入れることをやめたことになるんです。

これをもつといえは、エゴイズムになつちやつたんですね。そうすると、日本語で話しているんだけど日本語が共通

語でなくなっている感じですよ。そして日本語自身も英語のような日本語がたくさんできましてね。この間週刊誌を読んだら、コマールシャルだのデパートの宣伝文句にずい分英語みたいのはいっているでしょう。あれみんな日本語なんです。英語だと思つたら間違ひです。サラリーマンというのが出てますけれど、これは英語ではないそうで、英語だと office worker (オフィス・ワーカー) というんです。あなた方もサラリーマンだが、あなた方は office worker ではないはずですよ。あなた方は、educator、教育者です。サラリーマンなどと間違えちゃいけないんです。したがって、今の社会に共通語がなくなつたというのは、亀井勝一郎さんが生きている間にずい分「日本人にはもはや共通語がない」ということを嘆いていましたが、日本語はあるけれども、これは日本人の共通語ではないんだね。だから話したつて分からない。もしベンダサン氏みたいに考えたらすれば「おれはこういう言葉を知っているけれど、おまえは知らないだろう。この言葉を知つておれの仲間だけれど、この言葉を知らないからおれの仲間じゃない」つていうふうにいつてるだけなんです。つまり仲間であるかどうかを試しているだけなんです。教育の世界で使われている言葉は、なお、そういう言葉が多いんです。で、人間がエゴになつてしまえば、あるところで読んでこれはその通りだと思つただけれど、「人

間が自分のことしか考えることができなくなってしまふ。つまり、奇型の人間になってしまふ。知識というものは、それは知識ではなく無知になってしまふ。そして、愛というものは、愛という創造ではなくて破壊になってしまふ」ということをその人はいつています。人間がエゴで、全く人の悲しみも人のいつていることも深く分かつて、それを理解する、そういう能力を失つてしまふばだね、自分のことしか考えていない人がもつている知識と称するものは、これは無知に通ずるんです。無知よりそれは悪い。こういう状態の中で日本が、こういうふうに変つてきている中で、教育もますます變つてきました。ぼくは、実感がなくて、観念的といった方がいいと思うんだ。実はこれが教育というものなのか、教育という制度だけがあばれまわっているのが……。観念的な教育であつて、人間がこの中に立ちただかつている。人間がちゃんと生きていくという実感のないものが教育という名前で通る状態というのが、今私たちのまわりに起こつていくと思うのです。

### 中教審答申

中教審答申というのは、毎日の村松さんの話によると「憲法改正を考えて、そしてその地ならしにすること、家永裁判なんかで困つた状態が起こつていくわけなんですけれども、こう

いう問題に対する対策も考えているんだ」といいますけれども、その通りかどうか、ともかく隠されてる問題というのはやっぱりあると思うんです。ぼくはこれを、間に合わせ、いいいたいと思う。ぼくは日本の政策立案者を非難しているだけでいいとは思いません。日本人自身がこの間に合わせでやっているんですから、根本的に考えて覚悟してやっているといることが少ないんですから。にもかかわらず現在、日本の経済的な活動、経済大国としての日本の活動舞台は昔の日本よりも世界中に広がつちやつたでしょう。それに比べて精神的な舞台はずつと狭くなつちやつた。日本人の精神的な活動の舞台は本当に狭くて、エゴしかなくなつちやつた感じがです。

私がこのごろ考えてきて、これは正しいと思つていられるけれども、教育というものを指導要領とか日本の間に合わせ教育の考え方の中で考えるんじゃないかと、教育というものを少なくともアジアという舞台で考えるべきだということを、このごろ考えているんです。だって、日本が今、経済大国だということできらわれながらも強く世界中に売つていますね。その経済的な活動範囲は、世界中に広がっています。世界のすみずみまで、南米でもアフリカの南の方まで全部経済活動は広がっているわけでしょう。ところが、日本人の精神的活動、すなわち精神的思想とか物事を考えていく心の働きというものは非常に

狭いですよ。小さいことのようにだけれど幼児教育という問題も、少なくともアジアという舞台で、弧立した日本だけを考えていないで、もっと欲をいえば、人類の今日的状況の中で、それを舞台として日本の教育はどうならなければいけないか、というふうに舞台の設定をしなければいけないと思うんです。

で、そういう時に岩井事務局長が中国へ行って周恩来と会いましたね。そしたら周恩来という人は、現在実によく活動してますね。ぼくとちよっと名前が似てますんでね、ぼくよりかなり年上なだけども、実に若々しい。岩井事務局長にこういってたというんです。中教審の答申なんか出たから話したんだと思うんですけども、教育制度の話をしていたら「日本の就学年齢は長すぎる。そんなに長く勉強していたら頭がおかしくなっちゃうじゃないか」って。ぼくは、これは実に中国の人は公式の会で話す時も、こういうパーティで話す時も本当のことをいうんですね。日本人は特別改まった時には、改まったようなこといっててね、ふだん話す時にはもう責任とらないというね。「あれは酒の上で」なんていうけど、そんなことないですね。中国人は、だからぼくは、周恩来がいろんな時にいっている言葉を集めておくとおもしろいと思うくらい、実に、あれだけ日本が捕虜をとっつかまえて、殺したりなんかして悪をつくした日本人に対して非常に誠意をもって、弟分のように見て、日本

のために発言しているように思うんですね。

それを、この間日本の就学年齢……中教審っていうのは、ずっと長くしようというんでしょう。下の方もね。幼稚園の方を学校の体系の中に入れちゃって、三歳から幼児学校っていうのを作ろうというように、これやっぱり大国意識なんだと私は思う。これに対して周恩来の言葉は、実にいい言葉だと思っただすね。そう思いませんか。日本へ来て、つぶさに見て帰ったような感じがしますね。それを今度、幼稚園から勉強を始めてだよ、二度とない幼年時代と小学時代と十五、六という最も大事な年齢も全部そのために犠牲にしてだね、生まれてから二十年以上、これを棒にふるせるつもりでしょうか。頭が変になりますよ。少なくとも勉強しようという、自分でやろうとする気は起こらないだろうと思うんです。これはおれがやらなくてはならないんだ、これを一つやって一生このためになんかやってみよう、という決意をすることは、日本の人たちはもうなくなるんじゃないでしょうか。で、周恩来は「勉強だけで年をとっちゃうんじゃないか」という、これはなんだか皮肉というもんじゃない、皮肉よりもっといい言葉だなあ……。勉強するだけで年をとっちゃいますよ……。皆さんもこの種の「勉強」をしないことを望みます。(笑い)

## これからの教育

日本の教育はここで、全体が変わらなければならぬと思ふのです。少なくとも受験体制みたいなものはやめなければいけませんよ。そして教育全体の中に慢然となれてしまつてゐる教育が教育だと思つちやいけないんだ。人類は、もつとそれよりも大きな規模の大変化の中にいるんですから。中国のまねなんかすることがいいとは思わないんですけれども、ヨーロッパの人たちも、社会主義の国でも自由国家群でも、教育を大学まで含めて根本的に変えなけりやならんとこに來てゐることは、みんな知つてゐるんです。だから、日本がマッカーサーに占領されてゐる時に、古い物を全部すてて、いやすてたんじやないんだけれども、名前だけ変えたんだだけだね。東京帝国大学を東京大学と変えただけですやね。国民学校というのを小学校と変えただけで、またどこかが元に戻つちやつたでしょ。元よりもつと悪いでしょう。ああいうふうにマッカーサーに占領された、戦争に負けたということ、そして、なんか過去のものを全部すてちやつてガラッと変えるというんじやなくてだね、主体性をもつて、根本的に変えなくちやいけないんだと思うんだ。そして、それはいうまでもなく中教審が出している答申の点とは全く違ふものでなけりやならぬと思ふんです。その基

本になつてゐるものをぼくは考えると、全体に知識の教育というものと合わせていうよりも、知識の教育と先行して労働による教育と、これはおそらく自己教育です、芸術による教育というものを、この三本がちゃんとできてくるということがこれからの教育の改革の基本だと思います。

ホイジンガーというオランダのふしぎな人が書いた「ホモ・ルーデンス」という本もありますけどね、やっぱり二十世紀というのはいろんなふうになつてきますけれど、人間が能動的に遊ぶということを失つた時代ですよ。レジャーがたくさんあるけれど、進んで遊んでるんじゃないですよ。つまり、金をはらつて遊ばせてもらつてゐるわけなんですよ。だから、ここでいつてゐる労働と芸術と知的な豊かさ……知識の教育のことじやないんだ。知的に豊かになることですよ。物事を考えていく知的な働きがエレガントであつて豊かであるということが知識の教育なんですやね。そして、どこまでそれが深くなつていくかというのが知識の教育なんです。こういう知識の教育に先行して、あるいはそれと合わさつて、労働ということ、骨惜しみしないということ、と芸術の教育と三本の柱があつて、始めてそこで全人的な全面的な発達というのが、そういう三本の柱にささえられなきゃならない。

そういう中で幼児教育も変わらなければいけないんです。そ



して幼児教育は、全体の教育が老衰して形だけになってきてるわけでしょ。まあ木でいえば、大木が老衰してくさりかけている時に下の方から若い芽が生えてこなけりゃいけませんよね。ぼくは今まで、ただ量的に延長して、そして権力者や各人が自分の手段として、よらば大木というんで集まってきた大木である教育は、ここでもうくさりかけて倒れかけている木のようなものだと考えます。こういうふうな教育が全体に変わらなければならぬ。

ぼくは大学なんかはいらぬ方がいいと思うんだ。大学は研究所みたいになつた方がいいと思うんです。そこへ志のある人はいつてくればいいんですよ。大学へはいればはいるほど表情がなくなるといふところもたしかにあるのです。小さい子どもを相手にしている人だとね、なんかわからないけれど、まだ *passion* をもつてるでしょう。自分でも説明がつかないものですね。なんかやらなくちゃいけないと思うでしょう。それは、本を読んでいるよりも生きている人間を見てるとね、なんかやらなきゃならぬという、自分でも説明のつかない *passion* がわいてくるはずですよ。で、幼児教育は変わらなきゃならぬ。教育が若返るために、もう腐敗しかけている巨木のような、図体だけ大きいけれど精神を失つたものがそこへはだかつて……。

ここで幼児教育が若返る、たてなおされることによって、全体

が再び生きかえるというために、ぼくは幼児教育は「改革」(過去のいいものをとり返す、といつてもいい)されなければならぬと思つてゐるのです。そして、その問題の周囲にはいろいろの問題があります、その問題のまわりには、地域とか家庭というものが……。地域の生活というものは破壊されているんですけども、核家族というふうなものになつてしまつて親子の關係とか、近隣の關係みたいなものが、地域とか文化とかいふものが、息の根が切れたような状態になつてゐること、つまり、家庭というものがここで生きかえらなければならぬんです。

家庭というものがどういう形で現在において意味をもちなすことができるか。それはイギリスのジョゼフ・ニーダムが中国についていっていることが大変刺激になるんですけれども……。中国では革命後核家族になつたといひますね。しかし、核家族になつたことによつて中国は「社会的な連帯」は昔よりも、もっとよくなつたといひます。つまり、核家族になつたことによつて、社会的連帯と親子の關係は昔よりも豊かで味わいの深い広がりのあるものになつた、とニーダムは見えています。日本は核家族になつて「そこで止まつて」いるわけなんです。幼児教育というものは、そこへ集まつてくる子どもたちの家庭の生活をも生きかえらせなければならぬと思ひます。そういう役割をすべきだと思ひます。

上の方へ向かつては教育がますます味もそっけもない、単に競争の場になっている、この死骸のようになってる大きな建物である教育というものに生き生きとした生命を通わせる役割も、これからの幼児教育はうけもたなければならぬと思うのです。そういう意味では今までのように保育所・幼稚園というものね……ついでにいうけれども、保育所・幼稚園なんでものを別々にしているなんていうのはもう世界中にはないんですね。日本だけが、この形式的なことではなんか古い形をそのままやっています。保育所と幼稚園は一つになるべきです。こういうことを、もし日本の将来を本気に考えたならば、社会福祉という問題がそっちのけになってますけれど、公害の問題なんかひっかけてきて、これはどうしても一つにならなくちゃならないのですよ。ぼくは「けんこんいってき」という言葉をこの間から考えていた。これ、いい言葉でしょう。けんこんいってきというのをやらなきゃいけません。もう、慢然と過去の習慣にへばりついているべきじゃないんです。そして、イギリスのような infant school でもいいですけども、そして、それは政府の命令で動いているんじゃないで、ヨーロッパの国々がやっているように個人がそれを始めても、政府はそこにお金をまわす、というようにすべきだと思うのです。ベルギーやオランダはそうですね。それから北欧諸国は社会福祉の重要な一環として

幼児教育というのが組織されているのですから。日本は教育という、国民を支配するのに都合のいいものの中にいれてしまおうとしているんです。そうして、幼児教育というものが単に子どもを守るという、子どもを保護するというのではなくて、社会がこれだけ変わったんだから、今までの小学校や中学校でやっているのと全く性質が違う「教育の始期」を本物にするという。そういう意味で「教育的な役割」ももつべきだと思うのです。

### おわりに

ここで時間がもう来てしまったんですけれども、ぼくは一生懸命勉強して考えてきたことがいえなくなりました。それは、本だけ紹介しておきますが、ガローニのこの本読んでましてね「二十世紀のマルキシズム」っていうんですが、ぼくはマルキシズムのことよく分らないのですけれども、しかし、社会主義という、最後に簡単にいいます、民主主義というものがフランス革命の前後から起こりました。で、民主主義というものでアメリカはできました。それまでの社会には未来はなくなってきたから、民主主義が未来をつくるというので出てきました。だから十九世紀のアメリカはぼくは好きだけれどね。フォスターのいた時代のアメリカはいいでしょう。エマーソンとかフォ

スターのいた時代はいいですよ。ぼくは十代の時、あこがれて一人で貨物船に乗ってアメリカへ行こうと思った時があったけど……。(笑い)しかし、二十世紀になってアメリカが大国になってくるにしたがって民主主義というものは、もはや未来を十分に約束するみずみずしいものではなくなりましたね。そこで、共産主義というものが出てくるわけです。

それが二十世紀初めのレーニン、そして現在の中国なんです。そして途中で、共産主義というのはいやっぱりスターリンのような独裁みたいなものになって官僚がいばり出すというふうになって、なんか、こういうふうな未来の息の根が、樹液が通っていないような感じになってきました。そこでファシズムという「精神的な(ものを強くいう)思想」が起こってきたわけです。これは共産主義の欠点―共産主義が物質主義という傾向をおびてきますから、少なくとも一時的には―から起こってきて、未来というものをつくろうとしました。しかし、この三つとも今や未来というものを豊かにもっていない感じでしょう。そうすると、日本では今、この物質主義が未来であるような錯覚もっているのです。これを経済大国というんだけれど、世界の人々が驚いてるのですけれども、ぼくは、日本はもう住めなくなると思っています。「この調子でいけばGNPは上がるだろうけれど、日本人の神経は破壊されていっちゃうだろう。日本の教育

は……教育なんていったって、もう教育の役割は果たさないうらう。日本の自然は根本的に破壊されて戻らないだろう」というふうにいっています。にもかかわらず、日本は戦争に負けつつがないみたいに、仕返しみたいにいね、経済大国になるという点ばかりできました。これは実に片よった物質主義でしょう。そうすると、未来というものがないじゃないか、日本人に思想というものがないでしょう。その思想というものは今日、共産主義も変わってきているのです。

あの中国、中国の社会主義も変わっていると思います。そして、社会主義というけれども人間が生きている意義と、生きてきた歴史に意義をもたせようというのが社会主義の根本の目的だったわけですね。つまりいきづまってきてしまった民主主義というものの、資本主義というものにさわるのですけれども、そういういきづまってしまった中で人間がこれから作る歴史と、そしてその歴史の中で人間が生きてくる意味をもつとはつきりとつかむために「思想」というものができてきたわけでしょう。ぼくは今、世界中の社会主義というものも含めて考えているんですけれども、あるいは社会福祉国家でもいいんですけれども、とにかく未来というものをどういう思想の中でさがすか、ということが問題です。そうして未来がなかったら、そこに教育はないんです。そこで、もう止まってしまっている社会には、も

はや教育はないわけじゃないか。で、中国もそこに含めていいと思うのですがね。それをぼくは、ティール・ド・シャルダンみたいに「ヒューマン・フロント」といいたいと思う。つまり、「人間主義」というものでいいと思うのです。というのは、それほど人間はできあがってしまった機構の中に埋没しているからです。人間というものを全面に出さなきゃいけない。そうして、その民族や人類の過去の文化や芸術というものを、もう一度考え直さなきゃいけないんです。

この芸術ということについて、ロージェ・ガローネから教わるところが非常に多いわけです。簡単にいえば、本当にハムレットとかアンチゴーンとかいうものを頭においた方がいいんだけれども……。本当に悲劇的な経験、それから宗教的経験（これは、宗教の教義のことじゃないんです）というものは、人間が人間を教育しているものである、という……ちよつといても分らないでしょうね。つまり、人間が人間のまわりの物質ばかり見てるんじゃないで、問題を人間の方にもってくれば、人間が自己の限界を越える働きをしているのは、人類の歴史の中にある悲劇的な物語とか、それからイエス・キリストの十字架とか、これは社会主義の人たちも、この価値を肯定しているわけです。そういう「悲劇的なもの」は、「人間が自己の限界を越えるのに必要」なんです。そういうものの価値をもうい

っべんわれわれは考え直さなきゃならないんです。単に経験主義といって、非常に世間的、世俗的な趣味の世界におっこちゃだめなんです。人間が人間として自己を越えるという働きをもってる経験があるわけでしょう。それが美の経験と悲劇やなんかを含んだ人類の遺産としての芸術的な経験なんです。

この最後のことを、ぼくはいいたかったですけれど、そういうことが、まずぼくは、幼児期にそれが生きてこなければならぬんだと思います。慢然と甘やかし言葉で甘やかして、ごきげんをとっていいものじゃないと思うのです。そして、子どもたちも、ごきげんをとってもらうことを望んではいないのだ、ということは、ぼくは、園長の経験として確信したように思うのです。

（昭和四十六年七月日本幼稚園協会主催幼児教育講習会）